日本バプテスト連盟 宣教部 教会音楽室 ニュースレター

No.20
2020年11月18日

礼拝さいこう

新型コロナウィルスに直面して教会は･･･②

教会音楽室長　江原美歌子

ニュースレター19号から3ヶ月、コロナ感染拡大状況が変化する中、教会・伝道所は祈り、対応しつつ礼拝を捧げています。前号の8つの教会礼拝事例紹介のコーナーでは反響をいただき、「この状況下で、互いの歩みの交換は大きな励ましとなった」との声が寄せられました。今号においても８教会の事例紹介と、対話をつなぐ応答としての「カウンターコメント」に加えて、「礼拝のオンライン配信」に関して、オンラインだからこそ久しぶりに開催することができた「地方連合教会音楽連絡協議会報告」等、この間、課題にあげられていること、経験してきたこと、諸報告、著作権情報をご紹介しています。礼拝をたてあげるため、また教会形成のためご参考ください。祈りあい、励まし合いの「協力伝道」の一助となることを願っています。

Index

1）「コロナ危機での相浦光キリスト教会の礼拝」・・・・・・・・・・・・・ 武林真智子（相浦光）
2）「運命共同体！教会＆幼稚園　～心は密に～」・・・・・・・・・・・・・・・・・ 末松隆夫（春日原）
3）「それでも賛美はやめられない」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 杉山いずみ（徳島）
4）「『コロナ禍』でなんだか枯れて、しぼんでしまいました。」・・・・・・・・・ 犬塚契（ふじみ）
5）「コロナ危機における礼拝の取組み」・・・・・・・・・・・・・・ 礼拝委員会　中根淨（花小金井）
6）「主日礼拝を守り通す、これまでもこれからも」・・・・・・・・・・・・・ 松澤京子（新潟主の港）
7）「コロナ危機の中の盛岡教会」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小川紋子（盛岡）
8）「『新会堂を与えられて』けれど無牧師教会となって」　・・・・・・・・・・・ 桜井明（苫小牧）
9）　**事例紹介に応答して～カウンターコメント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 濱野道雄（鳥栖）**
10）賛美歌検討委員会議から新しいクリスマス賛美歌紹介
11）「礼拝のオンライン配信」における「双方向」性・・・・・・・・・・・・　山下真実（ふじみ野）
12）日本賛美歌学会設立20周年記念オンライン特別講演会に参加して・・ 長谷川ふみか（相模中央）
13）「リンカルトとその時代」（一教会の巻頭言から）・・・・・・・・・・・・・・・・・坂本献（所沢）
14）地方連合教会音楽担当者連絡協議会報告
15）礼拝と賛美歌著作権Ｑ＆Ａ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・教会音楽室

新型コロナウィルスに直面して教会は・・・

「コロナ危機での相浦光キリスト教会の礼拝」

相浦光キリスト教会　武林真智子

長崎県に発令された緊急事態宣言下の3回の礼拝は、集まっての礼拝をとりやめて、牧師と奏楽者のみの礼拝としました。　その他の方々へは予め土曜日の午前中に週報と説教原稿をメール送付、お届け、教会での受け取りなど、様々な方法で、礼拝出席者へお届けすることができました。そして、礼拝と同じ時間にそれぞれの家庭で礼拝を捧げていただくこととしました。また宣教の音声は、教会のホームページに添付することとしました。

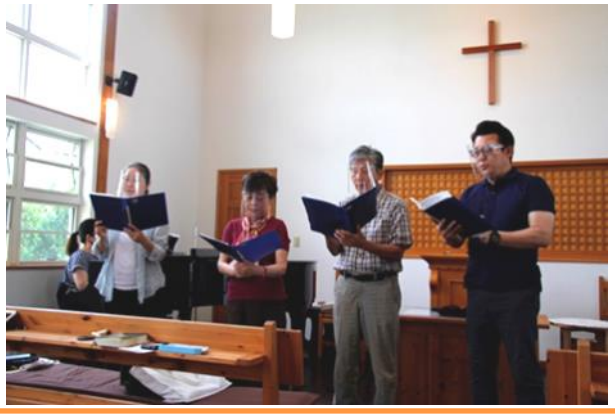
その間に、一緒に礼拝するためには、どのような工夫が必要なのかを話し合い、与えられた恵みを確認しつつ、順次対策を考えました。

＜恵み＞

立地：私たちの教会は、佐世保市の中心から約10キロメートルも離れ、水田の真ん中に立地し、側面・天面の窓を大きく開けることが可能

出席者：礼拝構成メンバーは、そのほとんどが佐世保市と、隣町の佐々町の住民であり、県外や海外からの来訪者もほとんどなく、自家用車、徒歩など、公共交通手段を用いずに礼拝出席が可能。

礼拝堂：会堂建築において、講壇を高くすることなくフラットな場所からの宣教や証を行う構造（飛沫の下方向の流れが発生しにくい。）72名（長椅子4名）収容可能な会堂に平均25名の出席者



＜対策＞

出席者：手洗い、消毒、マスク着用は守り、体調不良の時は家庭礼拝を推奨。

環境整備：礼拝堂の長椅子の位置を大幅に変更し間隔をあけ、またサイドルームも解放して長椅子を移動して、家族以外の方々は、前後左右おおよそ１m以上の間隔を取る。

さらに講壇からの発言者や聖歌隊が賛美する場所から長椅子までの距離も２mをあける。

換気：側面にある窓を開放し、さらに礼拝堂の天井にある天窓と大きな扇風機で、天窓から取り込んだ新しい空気を上から下へと強制的に落とす気流をつくり、効率よい換気を心掛る。

宣教者・司式者・聖歌隊：講壇からの宣教者、司式者、また聖歌隊のメンバーはフェースカバーをつけて奉仕をする

目にみえない細菌やウイルスに対して完全な予防方法が見つかっていない状況が続く中で、共に礼拝したいという出席者の熱い思い、また礼拝を前奏から始まる一連プログラムで続けたいという願いの中で、祈りつつ実施しています。

「『主の家に行こう』と人々が言ったとき　私は喜んだ」詩編122編1節、「主を賛美するために民は創造された」　詩編102編19節

「運命共同体！教会＆幼稚園　～心は密に～」

春日原キリスト教会　末松隆夫

３月の教会定期総会で2020年度の活動方針が承認され、「神の家族として共に祈り、共に礼拝する」ことを３つの柱のひとつとして歩み出した2020年度でした。しかし、4月7日の「緊急事態宣言」発令に伴い、「受難週主の晩餐式」(9日)、「受難日祈祷会」(10日)を急遽中止し、「イースター礼拝」(12日)から5月17日までの「主日礼拝」を牧師家族と礼拝録音担当者ら数名だけの礼拝とし、各家庭で礼拝をささげてもらいました。それは、礼拝厳守の教会で「礼拝は、時間をささげ、財をささげ、賜物をささげ、からだをささげることだ」と教えられて育った私には、堪え難い痛みでした。活動方針の「共に祈り、共に礼拝する」という「共に」は「心」だけでなく「場所」をも意味するものだとの思いが私の中に多分にありました。今回のコロナ禍はそのような私が砕かれる時だったように思います。

自分たちにできる感染予防策を徹底して礼拝を再開した日、礼拝出席者数はそれほど多くはありませんでしたが、共に礼拝をささげることができる恵みの大きさに胸が熱くなりました。それと同時に、礼拝に来たくとも来られない人たちの痛みに寄り添うことの重要性を再認識させられました。

電話やメールでの安否伺いをはじめ、録音した礼拝をホームページにアップロードし、ホームページを見られない教会員にはCD-Rに焼いて週報と共に送付するという働きが継いでいます。

緊急事態宣言が解除され、福岡での感染者がそれほど増えていない今も、ホームに入居されている人の外出自粛や面会禁止は継続中です。なかでも、福祉関係の仕事に勤務している教会員の心労はとても大きなものがあり、仕事上「密」が避けられない中で、感染者になっても被感染者になっても大きな影響を周りにもたらしてしまうという不安との闘いがあります。

それは幼稚園も同じです。春日原教会には附属恵星幼稚園があり、園長として関わっています。文科省や内閣府では、ソーシャルディスタンスをはじめ小学校と同等のことを幼稚園に対しても要求していますが、幼い園児たちは群れるものです。接触なくして保育はできません。毎日の関わりの中で「家庭で感染し無症状の園児がいるかもしれない」「園児からもらって教会の高齢者に移

してしまうかもしれない」という心配は常にあります。　教会と幼稚園、どちらかで感染者が出てしまうと両方とも活動が出来なくなってしまいます。まさに、運命共同体としての日々であり、活動を広げたい思いと感染リスクとの間で葛藤の連続です。

これからも「三密回避」は求められるでしょうが、心は常に密でありたいと願っています。

「それでも賛美はやめられない」

徳島キリスト教会　杉山いずみ

「いかに幸いなことでしょう　あなたの家に住むことができるなら　まして、あなたを賛美することができるなら。」詩編84編5節

コロナウイルスの感染拡大が言われ始めても徳島は感染者数が少なく2月から4月では感染者が5名、5月は感染者がゼロでした。それでも、心配して礼拝を欠席する方も出てきて、教会では消毒や換気に注意しながら、礼拝のライブ配信（Youtube限定公開）を始めました。教会のLINEグループを作ってライブ配信をしながら、礼拝は続けることができました。今考えると普通に礼拝を守ってもよかったのではないかと思いますが、感染者が少ない故の緊張感があり、全国と足並みを揃えるように緊急事態宣言の出た4月26日～5月10日の3回の礼拝はオンライン礼拝を中心としました。とはいえ、感染者が少ないこともあり、それぞれの判断で2週目、3週目には礼拝に戻って来られる方たちも居ました。

徳島教会は住宅地にありますが、窓を開けて賛美をしていても苦情はありません。それどころかライブ礼拝中「最近賛美歌が聞こえなくて寂しかった」と隣家の方から言っていただき嬉しく思いました。昨年度礼拝出席者は20名程度でしたが、コロナ自粛で礼拝出席は15名程度となっています。広い会堂とサイドルームも開け放ち、座席を増やし、ゆったり座ることができるので、集う人も、休んでいる人もそれぞれの場所で安心して礼拝を守れる環境が整えられていることに感謝しています。礼拝人数が減ったこともあり、もともと小さかった賛美の声はますます小さくなり、「声を小さく歌いましょう」と注意する必要もありませんでした。賛美歌の曲数を説教前3曲から2曲に減らしました。

感染者の少ない徳島でも近隣教会では「賛美を歌わない」「伴奏を聞きながら歌詞を読む」など、取り組みはいろいろなようです。

いろいろな集会や食事会が制限される中、孤立や閉塞感を感じていた時に、徳島の超教派の若手牧師の仲間たちで「賛美動画をつくろう」という声が上がり、5月に徳島若手牧師フレンズバンドで「球根の中には」という動画をアップしました。一緒に集い賛美することが制限される中、送られてきた伴奏を聞きながら一人で賛美をしました。手話は所沢教会の太内田さんに動画を送りアドバイスをしてもらいました。離れていても一緒に歌っているということを感じながら撮影でき、とてもよい励ましとなりました。

9月からzoomでも礼拝や祈祷会に参加できるよ

うになり、ライブ配信を一方通行で見ていた時よりも久しぶりに顔が見える、参加した気持ちになれると喜ばれています。

9月27日には高松恵キリスト教会とオンライン合同礼拝をしました（写真）。徳島教会の伴奏と賛美を聞きながら恵教会では歌ってもらいました。牧師の交換講壇よりも、教会の雰囲気を互いに知る機会となったと好評です。オンライン礼拝の可能性を探りながら、コロナ下の礼拝が豊かになるようにと模索を続けていきたいと思っています。

「『コロナ禍』でなんだか枯れて、しぼんでしまいました。」

ふじみキリスト教会　犬塚　契

80歳を超えた教会のおばあちゃん2名とチャーチハウス（南カナンハウス）で共同生活を始めてもうすぐ3年になる。その一人、車椅子生活のおばあちゃんは、「礼拝がしたい。教会のそばに暮らしたい」と願い、特別養護老人ホームから退所してきた。ポストポリオ症候群の影響が出始めてから移乗時に転倒のリスクがある。回避するには、もうベッドの上から動かないほうがよいのだと思う。安全とリスク、自由と束縛、自主性と依存性、生命と「いのち」…それらは、ずっと南カナンハウスのハラハラしたテーマだった。はたして「いのち」とは何だったか。

そして、2020年の初春「コロナ」が起きた。3/2小中高に休校の要請、3/24東京オリンピックの延期が発表、4/7緊急事態宣言が発令された。一か月の予定だったが、最長2年まで審議なく延長可能な宣言だった。連日、感染者数だけが報じられ、「いのち、いのち、いのちを守れ」の大合唱が始まった。「三密」に反してスーパーは混雑し、あらゆるものが品切れになり、マスクは手作りされた。自粛警察、マスク警察、帰省警察が登場し、感染者の足跡を追うアプリが開発され、社会はアクリルと半透明のシートに覆われた。4月、日本を覆った空気を新聞の天声人語は「下からの総動員体制」と表現していた。「下からの…」それは上から来るものだとずっと構えていたのに。

そして、教会も無縁ではいられなかった。よくよく教会を支えておられる方から、「（緊急事態なのに）教会は、まだ礼拝やっているのって友人から言われました」と迫られた。得体の知れない新しいウィルスをみんなが恐れた。執事会は長時間となり、ふじみ教会は、イースターから奉仕者なしの「ライブ配信のベースの礼拝」へとシフトした。「誰もが気兼ねなく自宅で礼拝できるように」を大切にし、受付から司式、献金、パワーポイント、奏楽などの奉仕は基本休止となり、牧師が司式をし、不慣れなギターやヒムプレーヤーが伴奏となった。奏楽者たちの選曲もなくなり、突然白紙になった週報を眺め、週末に賛美歌を選んだ。アカペラでも歌えるテゼ共同体の賛美や「GOD　BLESS　YOU」（岩淵まこと）などを選曲した。歌えなくなっていくこの大切な過程をできれば、もう少し奏楽者たちと共有し、賛美とは、礼拝の彩りでなく、主への応答だったのだと確認したかった。

真っ先に休校要請を出された時、教師である友

人は「結局、学校なんて真っ先に休みになる副次的なものだったのか」と悩んでいた。その痛みは、よく分かる。今年、日本の教会の半数近くが礼拝堂での礼拝を休んだ。確かにインターネットを用いた礼拝配信の急激な進歩、覚えたネットミーティング、画面向こうでなされた未信者の家族との礼拝など、恵みと数えることもできる。それでもどこか行政からの自粛要請を礼拝にも適応し、「社会的責任」と空気を読み、使われる「いのち」の内実を吟味しないまま、強烈にたち上がった道徳の前で言葉を失い、2020年をやり過ごそうとしたのではないか。なんだか恨み節で心は枯れ、無力感でしぼんでしまいそうだ。

それでも、「副次的となった礼拝」は、そこが底ならそこから「再興」され得ると信じたい。「草は枯れ、花はしぼむ」そう、その通り。「しかし、われわれの神の言葉は…」イザヤ書40章8節

「コロナ危機における礼拝の取組み」

花小金井キリスト教会　礼拝委員会　中根　淨

会堂での礼拝と配信

当教会では、コロナ状況を予想していたわけではありませんが、すでに2年前から主日礼拝のメッセージ部分をリモート配信していました。コロナ状況に入ってすぐ、礼拝のあり方は、全面的な中止とせず、会堂では最小限の人数での礼拝を持ち、会堂への出席を控える人はリモート配信を通して、ライブやビデオの人も、時と場所を越えて同じ礼拝に与かっていることを大切にしています。そのために配信のための機器を揃えること、その操作に若い人たちの協力、また受信できるようにパソコンやスマホの利用指導がなされていきました。なお、リモート受信が困難な人には、週報とメッセージ原稿を届けることとしました。その後状況に応じて、感染対策をしながら、少しずつ会堂での礼拝出席が増加しています。

リモートでも「主の晩餐」

リモート配信による礼拝の中でも、一番重要な課題としたのは「主の晩餐」です。執事会で十分協議しながら、リモート配信であっても共なる礼拝参加であり、「主の晩餐」もその本質を大事にして、各自もその場で参加することとしました。その具体的な方法は、リモート配信を受ける人は、各自の所でパンとブドウ汁の杯を用意しておいて、会堂での主の晩餐に合わせて、共に与かるということです。なお、教会員の受け止めについては、今後詳しく評価する必要があります。

信徒の理解と参加

当教会の礼拝委員会は毎月1回開催し、次月の各主日の礼拝のプログラムと賛美歌の選定などを行っています。このたびコロナ禍の状況下で、教会員は「礼拝と賛美」についてどう思っているのかを問う「オンライン礼拝についてのアンケート」を集めました。その回答の概要は、まだリモートに慣れないこともありますが、離れていても教会の交わりに繋がっていること、共に礼拝と賛美を捧げることができる感謝など肯定的な意見が多く見られました。

礼拝賛美についての研修会

新型コロナウィルスに直面して教会は・・・

2020年度の教会の重点目標は「信仰生活を考える（特に賛美）」です。そこで礼拝委員会では、コロナ禍の状況での研修会の開催の是非や対策を十分検討して、7/26には江原美歌子先生を教会にお招きし、会堂とリモート配信による礼拝と賛美の研修会を開催することができました。研修を通してリモートでも教会の礼拝を共に与れること、そして改めて礼拝の意味と賛美の豊かさを確認することができました。

これからの教会のあり方を考えるため、「コロナ時代を生きる教会」をテーマに、来年1月に研修会を予定しています。

「主日礼拝を守り通す、これまでもこれからも」

新潟主の港キリスト教会　松澤京子

新潟もコロナ禍に巻き込まれ、主日礼拝出席停止の役員会決定を知らされたのは三月の初め、ちょうど主日礼拝について文章にまとめる機会が与えられ、教会員手帳を参考に「原始教会の時代からずっと毎週途絶えることなく行われてきた小さな復活祭」などと記述して悦に入っていた最中でした。突然足元の砂を波にさらわれたような心もとなさに襲われました。

心を鎮めるべく、祈るうちに古来多くの先人たちが直面したであろう数多の苦難が実感を伴って心に迫り、今私たちが直面しているこの事態もその延長線上にあるのだと感じ、そして、どんなときにも主は共にいてくださり、主日は守られるのだと信じるに至りました。出席停止の間も福久織江師はお一人、無人の礼拝堂で礼拝を捧げていてくださり、私たちはそれぞれの場で時間を聖別して礼拝を捧げました。心細いながら、誰憚ることなく好きな賛美歌だけを選び、自身のペースでみ言葉と向き合い、会うことのかなわない兄弟姉妹のために祈る、それはそれで満たされた時をいただきました。

一方で日増しに募ってきたのは、孤立感でした。礼拝のみならず、祈祷会も教会カフェをはじめとする全てのホール活動も停止となって、それまで週の半分は教会で過ごしていた生活から一転、家族としか顔を合わせることも会話することもない生活に変わり、そのことが大きなストレスになってきました。そこで始めたのが、主日礼拝開始前の時間の朝の挨拶です。メールやラインで可能な限り挨拶を交わしました。たくさんの励ましをいただき、日頃は疎遠だった、礼拝を欠席がちな方とも近況を伝えあうことができ、主にある繋がりを確認し、元気回復です。

そうこうするうちに、オンライン礼拝が始まり、画面超しながら福久師の司式の元、共に礼拝を捧げる兄弟姉妹をより強く意識できるようになりました。この原稿が掲載される頃、またどうなっているのか先は見えませんが、幸い九月上旬の現在は礼拝出席のみは許され、マスクをしたまま、二曲だけという制限付きながら賛美もできています。慢性疾患などによるハイリスクの方、仕事関係で制限のある方など、礼拝出席がままならない方のために、現在も説教の配信は続けています。オンライン礼拝の実現には複数の若い教会員が関わってくださり、今も継続してご奉仕くださっていることは感謝です。

「主の港」は地域を紡ぐ教会でありたいと、様々なミニストリーを展開してきました。今この状況の中ですべきは、感染防止のために地域に信頼される行動を選び取っていくことと、そのための自粛は止むないこと、枝葉をそぎ落としても主日礼拝は守り通す、その姿が地域の方たちにとって小さな信仰の種となりますように。

「コロナ危機の中の盛岡教会」

盛岡バプテスト教会　小川紋子

岩手県は全国で唯一、感染者ゼロの状態が7月末まで続きました。偶然が重なったからだと思いますが、要因をあげるならば、人口密集が少ないことと、高齢者が多いことや震災と津波を経験しているので命を守る意識が当初から高かったことが考えられます。

3月上旬、盛岡教会でも、いつ感染者がでてもおかしくないという緊張感の中で礼拝を守り、教会としての対応を役員会で協議しました。当然のように様々な意見がでました。「未知のウイルスのため今は集まることをやめるべきだ」という意見、「教会が主日礼拝をしないなんてありえない」という意見、「近隣の方々が今自粛生活をしている状況で教会が礼拝をし続けるのは証にならないのではないか」といった意見、「神さまではなく、健康を崇めているのではないか」という意見も出ました。しかし長時間の議論の末、健康に不安を覚える高齢の信徒さんや医療・福祉・介護・ドラッグストア等で働かれている信徒さんお一人お一人の状況を想像して、一時会堂で集まることを中止とし、各家庭で礼拝を守っていただきました。苦渋の決断でした。

家庭礼拝のために週報と説教原稿は各家庭に郵送し、来会者への対応のために牧師のみが会堂で守ることとしていましたが、「会堂で礼拝したい思いは止められない」と、会員の方が２名ほど参加されました。礼拝では感染防止のために歌うことはせず、心の中で賛美歌の歌詞を唱えました。初めての試みとして、インターネットを用いて礼拝のライブ配信も行いました。会員にとどまらず、見ず知らずの方も参加されたようです。高齢者や医療・介護・福祉現場で働かれている方々はしばらくの間、礼拝に集うことを自主的にやめられましたが、ネットがあって助かったという声もありました。

緊急事態宣言解除後は、感染対策を講じた上で、短縮礼拝で会堂での礼拝を行いました。盛岡教会は、幸いにも会堂が広く、天上も高いので換気の状態は良いようです。人数が少ないために密集することもありません。賛美歌の数を減らし、一節のみ、それも伴奏だけです。口では賛美しなくても、心の中で各自賛美しました。今は徐々に通常の礼拝の形に近づきつつあり、出席される方も増えてきましたが、様々な事情から礼拝を欠席されている方々もおられます。今は『月報』を作成して、会堂に来られていない方に教会のこと等をお知らせしています。集まれなくてもつながりをつくることが今の課題となっています。

「礼拝」「賛美」の基本的な考え方・・・とテーマが与えられましたが、振り返ってみて支えとなったのは、3月上旬の礼拝で読まれた聖書だったと思います。3/1の礼拝ではマタイ16：13-20、ペトロが信仰を言い表わす場面が読まれました。教会は建物ではなく、信仰告白こそが岩なのであり、信仰告白のある所にこそ教会が立ち上がるのだと読み、支えられたように思います。

新型コロナウィルスに直面して教会は・・・

「『新会堂を与えられて』けれど無牧師教会となって」

苫小牧バプテスト・キリスト教会　桜井　明

一昨年の９月に新会堂ができました。今まで一般の人々はわたしたちの教会がどこにあるのか、タクシーの運転手にさえわかってもらえていなかったのです。今では近所の方々に教会があることを知ってもらえるようになりました。教会の中は50名くらいの礼拝ができるようにと多くの方に指導され、あかるく音楽の響きもよい礼拝堂になりました。

今年の3月に田代仁牧師が辞任され、４月には無牧師教会となりました。当初、わたしたち教会員は自分たちで教会を守る決心をしていました。、函館美原教会の福田雅祥牧師と教会の方々が突然支援の手を差し伸べてくれました。最初は戸惑いましたが、苫小牧教会として喜びをもってパートナーシップ協定を受け入れさせてもらいました。支援の内容はこのようになっています。月一回は福田牧師が苫小牧教会に来て宣教をしてくださり、そのほかの週は送ってくださるビデオメッセージで礼拝を守っています。そのほか２か月に一度は室蘭教会の吉田尚志牧師が宣教にきてくださいます。奏楽に関しては、パソコンを利用して『新生讃美歌』から引用して奏楽をしています。

喜びも束の間、新型コロナの影響で、３月から礼拝ができなくなった週もありました。その後、牧師に送っていただいた説教原稿を教会員に配りました。5月24日から礼拝を再開し、兄弟姉妹とともに礼拝できる教会員の顔は喜びに満ちていました。この日から当初の予定通りに礼拝をささげることができるようになりました。

無牧師教会になった小さな教会は平均出席者が13～4名です。事務手続きや教会会計など4人の役員とそれぞれタラントを持った兄弟姉妹たちが協力し合いながら教会の活動が行われています。主の恵みを感謝し、日々の生活が安定しますようにと祈りながらみんなが一つになっています。

連盟はじめ各教会の祈りに支えられていることを感謝しています。

教会債などの借財を返済する努力をしています。ほかの教会からも献金をしていただき、わたしたちは本当に恵まれていると感じ感謝して教会生活をしています。３年間の契約で支援をしていただいていますが、その恵みに安心しきっているのではなく、多くの求道者を迎え、牧師が来てくれるのは近いうちか遠くなるのかわかりませんが、主に祈りながら希望をもって常に努力する　今日この頃です。

教会の礼拝事例を受けて

事例紹介に応答して～カウンターコメント

濱野 道雄 （鳥栖キリスト教会、西南学院大学神学部教員）

前回に引き続き、全国諸教会の生きた声を聴かせて頂き心より感謝いたします。私たちはイエス・キリストにあってつながっています。このつながりが、新型コロナ・ウィルスの影響に向き合う時に、希望と、実際に支える力になることを実感します。今は協力伝道の喜びが明確になる時かもしれません（徳島、苫小牧、花小金井等）。

夏以降、感染者数が比較的減少し、多くの教会で対面礼拝を再開されましたが、そのままリモート礼拝を続けていらっしゃる教会も少なくないと思います（新潟主の港等）。それは対面の尊さ、嬉しさを今まで以上に実感しつつ、同時にリモート礼拝もまた礼拝として神から与えられたものであると信じ、リモートと言う方法が持つ利点や可能性にも開かれたことによるのでしょう（徳島）。そして何より「礼拝とは何か」に真剣に向き合われた結果、その方法の多様性に開かれたこと（春日原）によるのでしょう。「賛美とは礼拝の彩りでなく、主への応答だったのだ」（ふじみ）、「教会は建物ではなく、信仰告白こそが岩なのであり、信仰告白のある所にこそ教会が立ち上がるのだ」（盛岡）といった、今年実感した「礼拝とは何か」にそって、変り続ける状況の中で、また歩み出す、そのすがすがしい諸教会の姿に勇気をもらいます。ただ、対面とリモートという複数の方法を併用する場合、教会として全体的に「礼拝」になっているのか、今まで以上に総合的な判断が必要になるとも思います。

その難しい判断の一つの例として、今回は主の晩餐についても考えてみましょう。福岡連合でアンケートを取ったところ、11月半ばまでの現状でいえば、回答があった23教会の内、一番多いのはパンと杯を使用しない言葉のみによる主の晩餐で43％程、2番目が（衛生に注意しつつ）基本的にはいつも通りが26％程、次が中止で17％程、またトングや手袋の使用等いつもとは違う方法で配餐している教会が13％程でした。全国にはリモート配信で主の晩餐を行っている教会（花小金井）教会もあるでしょう。実際、現在対面とリモートの併用礼拝が進む中、対面での主の晩餐を配信している教会も少なくありません。その場合、リモートで礼拝に出席している方々の主の晩餐への参加をどうお考えでしょうか。

リモート礼典について、アメリカの改革派等いくつかの教派はそれを認めると同時に、再開を待つ選択をも認めていますし、南部バプテストの教会でもリモート礼典を行っている教会はあります。このように、その教派や各個教会の「主の晩餐」理解や各個教会理解により、その決断には自由さがあるのが当然だろうと思います。

勿論、宣研ニュースレター№121にも記して

あったように、そこには慎重さと熟慮が必要でしょう。「いつもの慣習だから、それをネットで続けるだけ」ですとか、「信仰というのは心の問題だから、同じパンと杯を分かち合わなくてもいい」、あるいは反対に「ともかくパンと杯に意味があるのだから、皆で集う必要はない」といった考えでリモート主の晩餐が行われるならば確かに問題でしょう。

それと同時に、「主の晩餐にあふれていた教会の共同体としての主に在るつながりをどう続けるか」と真摯に悩み、リモート主の晩餐を決断した教会の方々の誠実な声も聴いています。また「主の晩餐をしない」あるいは「リモートによる配信は主の晩餐に位置づけない」というのも「しない」という一つの責任が問われる決断です。例えば、医療や教育関係者等、対面礼拝に出席できない人が、リモート礼拝で行われている主の晩餐を配信で見るにせよ、そこに私たちは参加していない位置づけなのだとされた場合、このコミュニオン（主の晩餐）において自分はコミュニオン（共同体）の一員になれていないのだと感じるならば課題があるのではないでしょうか。

飽くまで私見ですが、私個人はリモートでの主の晩餐は重要なポイントをいくつか考えた上で行う事に賛成しています。その重要なポイントについて、私はドイツプロテスタント教会（EKD）のウェブサイトに掲載されていた文書が考える参考になりました。そこにドイツプロテスタント教会では１２％の教会がリモート礼典を行っているという調査報告の後に、こうしなくてはいけないと言うより、このような点を慎重に考えてほしいと３点あげていました。

1番目は、緊急事態における礼典の意味はなにか（例えば、説教は続けて行うのに、礼典は止めて良いのかとも問えるでしょう）でした。2番目は、礼典は誰によって執行されるべきか、ということ。3番目は、身体をもって集うということが礼拝にとってどのような意味を持つのか、でした。

私はこれに、あと2つ考える点として加えておきたいのは、4番目として、その教会の礼典理解はどうなっているのかという点と、5番目として、礼典のあり方の決定はどのように行われるのか、という点です。

この5点を考える事が重要であり、一概にこうするのが良いとは言えないと思います。その上で、なぜ私は条件が整えばリモート礼典も良いと考えているのかを分かち合わせて頂きます。

まず4番目にあげた礼典理解ですが、バプテストは基本的に象徴説を取っています。日本に最初に紹介されたバプテスト主義について記された1935年の『バプテスト教會員必携』に「バプテスマ及び聖餐の表象的意義」とあ

ります。そこから考えますと、私たちはイエスの身体に主の晩餐をもってあずかっており、私たちはイエスとの共存をかねてからリモートで行ってきたとも言えるかもしれません。そのパンと杯自体は、信号にすぎないけれども、それが触媒となり、神が私たちをイエスとの共存に導く訳です。そうしますと、そこに必ずしもパンと杯がなければ主の晩餐が成立しないとは言えないでしょう。他の相応しい、実際の信号があれば良いのです。

その上で１番目に戻りますと、バプテストでは主の晩餐とバプテスマの二つの礼典を、サクラメントではなくオーディナンスとして考えています。つまり礼典が救いに至る行為ではなく、救われた者の応答と考えている訳です。応答行為ですから、人間が頑張って毎月行うこともありません。実際アメリカのバプテスト教会では年に4回程度行っているところも少なくありません。しかし神への応答だからこそ、何らかの工夫をして行うべきだとも思います。かつて按手（礼）に関してバプテスト連盟内で議論があったときに、按手を受ける前の牧師が説教はするのに礼典執行をさせないのは説教に対して礼典を軽視している事であり問題だ、という文章が当時の理事会から出されていますが、今回もそれは考えてみるべきでしょう。

２番目の礼典の執行に関しては、バプテストにおいては教会で認められれば牧師以外の教会員も司式を行う訳です。また参加者の方も、バプテスマを受けてなくても、主の晩餐から礼典に参加するいわゆるオープン晩餐の方式を取る教会も連盟の３分の１以上の教会であります。ですから、この問題に関してもクリアしやすいでしょう。

３番目こそがバプテストにおいては深く問われる問いかもしれません。確かに、信仰を個人の心の問題ととらえて、パンと杯という現実の食物を使うことを軽視したり、身体を寄せ合うという共同体性を軽視することは避けなくてはいけませんし、こういった「身体性の軽視」がリモート主の晩餐で進むならば問題です。ただ、そもそも身体性に関しては、たとえ教会堂に集う形でも、牧師の説教を一方的に聞いて帰る礼拝や劇場型礼拝では、そこに身体性は欠如しています。つまり他者との共存が、コミュニティが、そこから生まれない礼拝には身体性が無いと言えるでしょう。身体性を重要なこととしてもっとも突き詰めて考えた哲学者メルロ＝ポンティ（Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961）にとって身体性は他者との共存を生み出すために重要なものでありました。確かにネットの使用方法によっては、ブーバー（Martin Buber, 1878 - 1965）の言葉を借りるならば、参加者同士が人と人の「我 - 汝」の関係ではなく、人とモノの「我 - それ」関係になりやすいものでしょう。しかし神の前に人と人として共に生きる事へとリモート礼典が方向づけられ、工夫が模索され続けているならば、それも本来の礼典のあり方として正しいのではないかと私は思います。

そして５番目に、バプテストして考えるのは、牧師や執事会の考えや決断だけでなく、教会の皆で民主主義的にこの礼典のあり方が決定されるならば、リモートと言う形を選び取ることもありでしょう。

カウンターコメント

以上が私個人としての考えですが、教会によっていろいろと違うのは当たり前の話しで、５つの問いを通した上で別の結論を持っている教会に対して批判的になるつもりは一切ないと言うことを申し上げておきます。

冬が近づいています。感染者数がまた増え、礼拝にまた影響がでるかもしれません。しかし今年、私たちはいろいろな形で、ネットで、手紙で、祈りで、礼拝に参加する事が許され続けました。やはり私たちの信仰告白の上に、キリストは教会を建て続けて下さるのでしょう（盛岡）。そして実は「小さな群れ」であることが、まさに恵みであり、「恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」（ルカ12:32）ことを実感された教会もあるでしょう（相浦光）。このクリスマス、私たちの教会で、町で、世界で、コロナの影響で明らかになった「しわ寄せが行っている」人々に、キリストが共にいらっしゃる「小さな群れ」にもう一度思いを巡らせましょう。私たちの礼拝すべきキリストは今どこにいらっしゃると、私たちは告白するのでしょうか。

賛美歌検討委員会議から新しいクリスマス賛美歌紹介

この時代にあって、あたらしい視点をもって賛美歌が作られています。賛美歌検討委員会議では、「新生讃美歌アンケート」で取り上げられているそれらの賛美歌を学びつつ歌い、会議を始めています。その中からクリスマスの賛美歌を2曲ご紹介します。

「キリストは明日おいでになる」

『讃美歌21』244番

キリストは昨日来られたように明日もまた来られるという内容で、アドベントの最後の主日に歌われるために書かれました。未だあらたまらない世（私たち）にキリストの降誕の意味を問いかけ、5節では力強く主の来臨の希望を歌い上げていきます。　譜読みの難しさがあるかもしれませんが、歌いこんでいくと味わい深さが感じられる旋律です。作者はオランダ出身のフレッド・カーンで、ヒム・エクスプロージョンを支えた一人です。『新生讃美歌ブックレット』新生讃美歌アンケート「ホームレス支援特別委員会」内、「今後とりあげるべき賛美歌」として紹介されました。

「あがめよわが魂」

『讃美歌21』174番

『新生讃美歌』363番「キリスト教会の主よ」の作者ティモシー・ダドリー＝スミスが「マリアの賛歌」をパラフレーズし作詞したもので、新しい聖書を題材としたパラフレーズの形を世に知らしめた曲です。ヒム・エクスプロージョンの風を起こした「ダンブレーン会議」開始前、先駆けて書かれたもので、暗闇を突き破るように「知らせよ」が繰り返され、マリアの賛歌が私たちの信仰告白のことばとして歌われます。賛美歌検討委員会議では、さらに「マリアの賛歌」がアドベントの賛美に加えられるとよいとの意見が共有されていました。　　（引用文献：『讃美歌21略解』）

礼拝のオンライン配信をめぐって

「礼拝のオンライン配信」における「双方向」性

ふじみ野バプテスト教会　山下　真実

コロナ危機によって、これまで「礼拝のオンライン配信」など全く考えもしなかったような教会の多くが、そのことに取り組む機会を与えられました。ふじみ野教会もそのような教会の1つでした。私たちがその必要性を予感したのは、2月の後半に差し掛かった頃であったと思います。首都圏における感染の広がりを見ながら、3月第1週の主の晩餐式を延期、教会学校を休会としました。ちょうどその時期「はこぶね便」(キリスト教広告代理店)主催の「Zoom(ズーム)研修会」を通して、はじめてZoomという「双方向」のオンラインツールのよさを体験しました。導入のハードルの低さからも「これだ」と思い、翌週には執事会で共有、その翌週には使い方の冊子を作成、「もしものときには…」と来会者に配布、3月最終週に礼拝のオンライン配信がスタートしました。4月5月は、感染の広がりや電車での来会者の割合を鑑みて、「会堂に集まることを中止」していましたが、Zoomを用いて礼拝を継続…「礼拝に集まる」から「礼拝につながる」、「礼拝を共有する」という風に、表現も変わっていきました。6月からは会堂とZoomのハイブリッドで礼拝を行うようになり、この10月からは同じくZoomを用いながら、全年齢の教会学校を再開することになりました。

これまで、礼拝の配信についての方法を検討する上で、Facebook(フェイスブック)というオンラインコミュニティの中の「教会動画配信のための情報交換」というグループ(2020年10月現在、教団教派を超えた2000名以上が参加中)が非常に参考になりました。ひと口に「礼拝のオンライン配信」といってもその形は様々で、大きく分けると① 録画した動画による「オンデマンド配信」と② リアルタイムでの「ライブ配信」があります。さらに現在では、ライブ配信したものを録画しておき、いつでもオンデマンド配信で視聴できるようにしている教会も少なくありません。それらの方法によって、より多くの方がそれぞれの場所から、それぞれの状況に応じて礼拝に繋がることができるようになりました。教会の事情によって、それぞれの方法が選択されていると思います。

そのなかで、共通の課題として散見するのが、配信の視聴者側からの「応答」、また礼拝への「参与」についてです。① オンデマンド配信においては、配信はリアルタイムではないため、どうしても配信側からの一方通行の形になりがちです。それでも、メールなどによる出席(視聴)連絡、応答という方法が採られているのを目にします。② ライブ配信においても、メールなどによる応答の方法が採られているところもありますが、なかには「コメント」といわれる短いメッセージを用いて、リアルタイムでの応答の形を採っているところもあるようです。しかし、文字でのやり取りだけで礼拝へ「参与」することは、なかなか難しいように思われます。一方、ライブ配信のなかでも、Zoomなど「双方向」に音声や映像を送り合うことのできるツールにおいては、礼拝への「参与」の可能性は非常に大きいと思って

います。実際、ふじみ野教会においては、礼拝における「聖書朗読」と「お祈り」を、ご自宅からZoomで礼拝に参加されている方にも担っていただいています。

振り返れば、これまで礼拝における「出席者」一人ひとりの主体性というものを、どれだけ意識していただろうかと考えさせられます。礼拝の配信が始まり、これまで無かった配信者と視聴者という立場と方向性が生じたことによって、また、礼拝による「つながり」を改めて意識することによって、礼拝を再考させられています。

日本賛美歌学会設立20周年記念オンライン特別講演会に参加して

相模中央キリスト教会　長谷川ふみか

9月19日（土）、20周年という記念の年ではありましたが、コロナ危機の中の研修として記憶していくためにも大会は中止されず、オンラインで講演会が行われました。講師の横坂康彦氏は、日本賛美歌学会の設立発起人のお一人でありながら、大病され、それでも尚、これまでのご研究・ご経験を結集され知恵と力を尽くし活動され、今回の講演に臨んで下さったことに感動しました。その情熱の源泉は、紛れもなく、礼拝に不可欠な「賛美する」という「聖なる行為」「人を癒し、平和を取り戻す行為」の追求にあると感じました。

アメリカ・カナダ賛美歌学会の調査によると、国際的に礼拝で使用される賛美歌集の出版数は、1900年頃をピークに起伏しながら減少傾向が続いていると示され、意外に感じました。教勢の縮小、賛美歌のエンターテインメント化、教会音楽家の減少等々、厳しい現状が世界規模で明らかになっていることに危機感をおぼえました。

また、日本には賛美歌に関する情報を一括して取り扱い、推進機能するセンター的機関が存在しないということにも驚きました。

しかし、横坂氏は講演の中で数々の具体的な提案をされ、その泉のように湧き出る貴重なアイデアに、自分には消化しきれないながら圧倒されました。中でも１）賛美歌に活力を与えるのは、何より一般の賛美愛好家であること、２）人種や教派を超えた交流が大切であること、３）世界の文化は多様であり、それぞれ独自の音楽を用いて賛美することができること、４）賛美に関わるあらゆる面で若い世代の登用が望まれること等、示唆をいただきました。

今回の受講者が、それぞれに触発されて教会で用いられ、賛美が真に主の喜ばれる歌となり、礼拝が豊かにされ、次の世代に信仰が引き継がれることを思うと期待が膨らみます。このような貴重な機会を提供して下さった日本賛美歌学会のお働きに感謝いたします。

コロナ危機の中での礼拝　教会の巻頭言から

コロナ危機の中、毎週の礼拝ではどのようなことばが語られているでしょうか？　ペスト感染症の脅威の中での賛美について取り上げられた、所沢教会の2020年3月15日の巻頭言からご紹介いたします。

「リンカルトとその時代」

所沢キリスト教会　坂本　献

日々、コロナウイルスの収束を祈る日々をお過ごしと思います。　この折、リンカルトのことを思い出しました。リンカルト（Martin Rinkart,1586-1649）は現ドイツのアイレンベルクという町の銅細工士の息子として生まれました。　少年の頃、ライプツィヒに移り、聖トマス教会の少年聖歌隊に入り、その後、ライプツィヒ大学で神学を修めました。　卒業後はルター派の牧師になり、31歳の頃、故郷アイレンベルク教会の牧師に就任、その後30年間、牧師をしました。　彼の生涯は「苦難と悲惨の打ち続く30年」と呼ばれます。アイレンベレク教会の牧師に着任した翌年（1618 年）に「三十年戦争」が勃発。カトリックとプロテスタントとの間の戦争ですが、根本は聖書解釈ではありません。それぞれが国土や経済を自分たちのものにしようと相手を差別・放逐することから始まったのです。戦争や紛争は経済こそが元凶（例えば、干ばつ等の自然災害、政治の混乱から食料や農地、仕事を求めて他国に侵入する）。　30年戦争は拡大し、政治的利害のからんだ国際紛争に発展し、加えて、疫病や飢饉が何度もドイツを襲います。食料は欠乏し、各地から亡命者や軍隊からの脱走兵が押し寄せ、治安が悪化していきます。　その状況下でリンカルトは自分の家族も十分に食べられない中、報酬を前借りしては人々の援助にあてました。　妻を亡くした翌年、1638年に「ペスト（黒死病＝ペスト菌の感染で致命率は6～9割）」が拡がり、パンデミック に。リンカルトは毎日数十名の葬儀を司式、その数4480名に達し、町全体では死者数 8千人に及びました。リンカルトはその只中で祈り、礼拝を欠かさず、生涯66もの賛美歌詞を書き、その一つが世界的に知られる賛美歌（『新生讃美歌』85番「心込めてみ名をたたえよ」）です。　作詞は 1636 年でペスト流行前ですが、戦争の影響が厳しかった時代。歌詞には苦しみはあまり語られません。しかし、日々の悲惨の中で、主にある幸いを祈ったこの歌は、主にある「希望」を人々に告げ、歌われ、励ましを与えたのだと思うのです。

（引用文献：梅染信夫著「頌むべきかな～讃美歌物語２～」信教出版社、1993）

この他、ドイツの同時代、ペスト大流行下にに作られた賛美歌を紹介します。

フィリップ・ニコライ（1556-1608）

新生讃美歌257「『起きよ』と呼ぶ声」

新生讃美歌142「いとも麗しや」

ヴァレリウス・ヘルベルガー（1562-1627)

新生讃美歌599「偽りの世に別れを告げ」

▶パンデミックと賛美歌について、以下のサイトに文献（英語）が紹介されていますのでご参考ください。

https://worship.calvin.edu/resources/resource-library/hymns-for-a-pandemic-a-brief-historical-introduction

地方連合教会音楽担当者連絡協議会

9月10日（木）、13連合から代表者が集まりズーム会議ソフトにより「地方連合教会音楽担当者連絡協議会」（教会音楽専門委員会議主催）が開催されました。2時間という短い時間でしたが、連合内の諸教会の報告と課題が共有され、大変有意義な時となりました。このような語り合いの場が今後も期待され、「教会音楽カフェ」（仮称）開催の検討も始まっています。

西関東連合　清水栄光教会　石渡路子

ZOOMによるこのような会議に参加することは初めてで戸惑いを覚えながら出席しました。コロナウイルス感染が諸連合内の行事にも支障を与えていることが報告されていましたが、西関東連合でも、松本蟻ケ崎教会の献堂式(11/19)や三島教会伝道開始50周年記念礼拝(9/20)を教会単独で行わざるをえませんでした。またITの取り組みが教会間で随分と差があることも知りました。私たちの教会ではコロナウイルス感染対策によってオンラインを活用し、一斉連絡と礼拝説教の録音を聞くことができるようになり、教会なりの取り組みで教会員間の結びつきが強くなったことは大きな恵みでした。協議会を通して励まされ、コロナで分断された教会間のつながりを回復するため新たに計画していきたいと願います。

神奈川連合　湘南台教会　高砂久美子

コロナ禍の中、慣れないリモート会議が通常の事になりました。毎週の礼拝の進め方で悩んでいた私にとって、とても参考になる意見をいただいた会議となりました。参加者は13連合より各1名の代表者と専門委員の皆さまで、中身の深い会議となったと思います。教会は信仰を持ったキリスト者の集まりですから、お一人お一人のご意見は様々で、音楽担当者としては、とても迷いが多いです。でも、全国の担当者の方々も同じ悩みをもって戦っていらっしゃることが解り、安心をいただきました。今は、細心の注意をしながら、神様のご計画を信じつつ、心を込めて、賛美をして行くしかないと思いました。私達には、たくさんの心強い仲間がいるのですから。

東京連合　品川教会　岸本敬子

以前は連盟事務所に泊まりがけで集まり、2日間かけて協議をしましたが、今回は初めてのオンライン会議となり、各地方連合の皆さまと内容の濃い話し合いができたことは新鮮な感覚でした。

「コロナ渦における各教会の音楽の取り組み」として、細かくアンケートを取って、準備してくださった北海道連合のご報告や、西九州連合・長崎教会の聖歌隊の活動報告が特に印象に残りました。このような不自由な状況の中でも、皆さんが教会音楽に心をそそぎ、様々な工夫をして活動されている様子に励まされました。音楽委員会が現在休止中の連合もあり、課題も共有しました。

2時間という短い時間のなかでしたが、的確な進行によりすべての議題について協議することができ、多くの意見が交わされ、とても有意義な時間を過ごすことができました。感謝します。

礼拝と賛美歌著作権 Q＆A

Q: 礼拝をインターネット配信しています。クリスマス礼拝やイブ礼拝、キャンドルサービスでは、新来者や久しぶりの来会者のために一般でも馴染みの賛美歌を使いたいのですが、古い曲が多いので自由に使ってはいけませんか？

A: 古い馴染みの曲であっても、著作権が有効の場合があります。礼拝を動画配信する場合、連盟が著作権管理をしている楽曲については、申請をせずに用いることができます。連盟ホームページに対象曲のリスト（下のQRコードからアクセス可能）がありますのでご確認ください。このリストにない曲でも、著作権管理者の意向によって、使用申請を免除している例があります。

①　「日本基督教団出版局」の場合

2021年3月末までは使用申請をせず使用することができます。

151番「わが心は　あまつ神を」

160番「天なる神には」

164番「羊は眠れり」

186番「牧人ひつじを」

199番「暗き闇に星光り」

200番「もろびとこぞりて」　など。

詳しくは、日本基督教団出版局のサイトでのお知らせ（下記URL）をご確認ください。

http://uccj.org/news/37149.html

②　「由木康」の訳詞作品の場合

JASRACに管理委託をしています。JASRACでは、YouTubeやFacebook等、JASRACと利用許諾契約している動画共有サイトでの生配信であれば、許諾申請手続きをせずに使用可能です。また、生配信後にその録画をアーカイブとして残して掲載する場合も、個人や牧師のアカウントなら可能です。（教会・団体のアカウントの場合は申請手続きが必要です）

下記の例にあげる由木康作品の場合は、原詩や曲など、訳詞以外の著作権が消滅しているので、アーカイブ配信の場合でも申請手続きをせずに使用できます。

163番「きよしこの夜」

165番「荒野のはてに」

207番「緑も深き」　など

※205番「まぶねの中に」も、両方のケースに当てはまるので動画配信で使用可能。

動画配信だけでなく、例年のように楽譜も印刷して配布したい場合には、連盟での管理曲も含めてすべて、印刷使用の許諾手続きが必要です。

教会の財産である賛美歌を大切に用いながら、喜びあふれるクリスマスを迎えましょう。

教会音楽室からのお知らせ

『新生讃美歌』使用許可申請不要リスト2020（インターネット動画公開用）を4月よりご案内し2020年期間限定としておりましたが、コロナ感染拡大状況の収束が見えない状況を鑑みて、2021年度末まで期間を延長いたします。ご質問等ございましたら0488831091（代）までお願いいたします。